

南鮮に入り米軍支配下に入り、釜山から船で佐世保に上陸。昭和二十一年八月十二日に名古屋の母のいる家に着き、驚喜させた。

御主人の帰りを待つ。二十一年も、二十二年も生死不明のまま、二十三年八月、御主人がシベリア抑留から重患で舞鶴病院に復員しているとの通知をうけた八重子さんは、喜悅きわまつて舞鶴で対面。しかし、二週間後に息を引きとった。

二十四年十月、母親の説得もうけて、同じ大陸からの引揚者で妻を亡くした方と再婚した。中学二年の長女、小学一年の長男、五歳の次男、一歳半の三男の四人、それに八重子さんの小学三年の長女、小学二年の長男を連れて、とたんに六人の母親となった。

再婚した当時一歳半だった健治さんが、成長して、「育ててくれたのは、このおふくろさんだ。俺の本当のお母さんと思っているからね」と言ってくれたときは、八重子さんは嬉し涙がとまらなかったという。

(他)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

再び繰り返すまい

山形県 岩岡 キミコ

この八月十五日は、日本人にとって絶対忘れることのできない終戦の日である。

昭和二十年八月十五日、日本の敗戦、他国となってしまった北朝鮮で迎えた敗戦の事実、明日のいや、今日の生死すらわからない日々の暮らし、判断と決断を要する緊張の連続、住みなれた北朝鮮との決別、明日をも知れぬ我が身、家族の行方、毎日毎日、長い長い一日の連続だった。

私は朝鮮で骨を埋める覚悟だった。

大正十四年、小学校四年生の二学期、私はひと足先に渡鮮した父の後を追って、母と二人玄界灘を船で渡った。日本の統治国になった朝鮮で暮らしたいと考えた父は、最初一年半余り南鮮にいたが、その後、北鮮の平壤で鉄道員として過ごすことになり、鮮鉄の職員

として終戦の日まで勤務していた。

郷里、熊本の片田舎から南朝鮮の田舎町、そして北朝鮮の大都会平壤へ、熊本弁から標準語に近い外地の生活、でも子供のころは順応性に富んでいるのですぐに溶け込んでいった。

小学校、女学校を平壤で過ごし、京城の官立師範学校に入學した。

卒業後、北朝鮮平壤で就職、山形県より出向してきた主人と結婚。主人の小学校長転出に伴って、私は一時退職、二人で出舎回りがはじまった。

主人は山形県農村で勤務していたが、給料の遅配もあり、景気の悪い状況にあったなか、恩師（平壤師範学校教諭）に勧められて渡鮮したものだ。

最初、日本人学校の小さな小学校長から、朝鮮人学校二つを経由、終戦時は平安南道江西郡文洞国民学校で終戦。

朝鮮の日本統治に何の疑いもなく、当然のこととして地域に溶け込んで平和に過ごし、もちろん死ぬまで暮らすつもりでいた朝鮮、今にして思えば、当時の朝

鮮の人たちの願い、苦しみ、立場を知る由もなく、自分たちだけ平和に酔っていた若さと、洗脳されていた状況を今から振り返って、誠に申し訳ないと思う次第。

終戦直後 用心棒

転々と回る転勤族、貯金も金融関係のそのの責任者と仲良しになり、前任地に置くことが何の不安もなかった。共働きや父からの援助で貯めた「四千円の定期預金」も、父の前任地にあった。敗戦のどさくさでどうするすべもなく泣き寝入り。私どもの前任地での貯金通帳は比較的近い所だったので、早速、その警察の駐在所巡査部長に「御自由にお使いください」と送ってやったが、多分本人には届かなかったと思う。骨をうずめるつもりで貯えた貯金が、何の役にも立たなかったことは、何とも悔しい限りであった。

でも、幸せは金ではなく、心で満たされた。敗戦の日、主人の部下だった朴先生と李先生二人がやってきた。

「校長先生、僕たち今晚から護衛してやります。泊まります」と木刀を持ってやってきてくれたのだ。

昨日まで「氣をつけ」「休め」と号令が聞こえていた学校の運動場から、今日は朝鮮語で「チャリュツ」

「ヒイウツ」と聞こえてくるのではないか。その変わり身の早い負けいくさに見も心も碎かれてしまった身に、飛び込んでくれた二人の用心棒。地獄に仏のような嬉しさだった。この二人は私ども親子三人が、ここ江西郡の文洞を離れるまで、親身に守ってくれた。「校長先生、昨晩は隣の面の駐在所の部長さんがやられました」「今日は、○○国民学校の校長先生の家族が平壤まで逃げていくとき、追剥ぎにやられました」毎日、毎夜恐ろしいことばかりの報告だった。

二人に守られ、その他の教員も好意的だが、いつものような事態になるかもしれない。日本人は少し離れた所の駐在所一家と、一キロぐらい離れた所にある鉾山関係者の数家族だけで、全く風前の灯の存在だ。すぐ近くの駐在所一家とさえ連絡もとれない不穏な状態だった。そんな中で朝鮮人教員二人の用心棒は、全く地獄に仏様そのものだった。

しかし、独立の喜びと、日本人への憎しみにわく人

たちの制裁に遭わないかと、二人の熱血漢の身を案じた。だが、その好意に黙って甘えたい当時の状況だったし、心細さだった。

お陰で近隣の駐在所のように襲撃に遭うこともなく、どこかの校長さんたちのように追剥ぎに遭うこともなく、江西を離れるまで、とても心強かつたし安心して眠ることができた。

朴先生、李先生、ほんとにほんとにありがとう。

最終勤務地江西からの脱出

用心棒に守られているとは言うものの、近くには駐在所一軒、一キロぐらい離れた所に鉾山関係の人の住居が数軒あるだけで、周り全部が朝鮮人に囲まれた何とも不安な環境下にあった。わずか四、五百メートルしか離れていない駐在所の方とも話し合うこともできず、そんな雰囲気でもなかった。物資の面でお互いに助け合うこともできないことも大変悔しかった。

ラジオも聞けず、もちろん新聞も届かず、来る日も来る日もデマだか、本物だか分からないニュースにおびえ、これからどうなるかもしれない運命におののき、

思考力も判断力も失って空白になってしまった頭で、長いながーい一日一日を過ごすことが精いっぱいだった。「とにかく日本人が大勢いる平壤に出なければ」「こんなときに欲を出すな。体さえ丈夫なら何とかなる」

体は小さいが決断力抜群の主人の言葉に、最小限に荷物をまとめることにした。二組の夜具類、携帯用常備食などを準備し、家財道具のほとんどを仲間の朝鮮人職員に分けてやることにした。六学級の朝鮮人学校だったので、我々二人を除くと六人の教員と給仕が一人いた。

若い二人の女教員には、私の着物を分けてやった。チマやチョゴリに仕立てると豪華なので、とても喜んでもらった。お召や紬のような縞物や硬い生地は好まれないので、残しておいて米袋や保存食などを入れる袋を作った。丈夫で大変よかった。今から言えば最高にぜいたくな袋だった。

隣の教頭先生は本がとても好きなので、本箱に入れたままあげた。運動の好きな人にはスキーを。マンド

リン、蓄音機は音楽の好きな人に、独身者には夜具類、ラジオなど……。いろいろ考えて七人の職員になるべく不公平のないように分けた。そしたら、出発に際し餞別を千円ぐらい集めてくれて大変有り難かった。

私も家族の分は、布団二組とリュックサック三つに食糧と着替え少々をつめ込んだ。それと内地の主人の実家から持ってきていた、日本刀一振りも護身用として忘れずに。

敗戦から三、四日経ったと思うが、出発の日は平壤までトラックを工面してくれた。男職員四人がトラックの周りに立ち、私たち親子三人と荷物を真ん中に、中央に高々と朝鮮国旗を立てて、平壤まで送ってくれるというのだ。

有り難いことだった。江西郡のここ文洞に着任して一年半、月日も短いのに温和な主人がいろいろ面倒みたせいだったのだろうか。飲めもしない主人が酒好きな職員によく飲ませていたので、その薬が効いたのだろうか。敗戦の日本人校長を見送るのに、全く親切なみんなだった。

沿道の人たちはトラックの上の自国の国旗を見て、片足と両手を挙げて「マンセイ、マンセイ（万歳、万歳）」と独立の喜びを体いつばいに表現してトラックを見送っていた。

これから先の不安と、早く祖国の上を踏みたい願いがこもごも入り乱れ、住みなれた風景に別れを告げる余裕もなく、仲間の職員の最後まで心の配りに感謝しながら、トラックの底で親子三人荷物の中に埋まるようにして、砂利道の震動にゆられ、八月の暑さの中で震えながら平壤に向かったのだった。

こうして昔の朝鮮の仲間を守られながら、平壤の鉄道官舎の伯父のもとに身を寄せることができた。

度々の引越

最終勤務地、江西郡文洞面から日本人の大勢いる平壤に脱出したのは、終戦直後の八月中だった。鉄道官舎の伯母の家族を頼って……

ところが、その官舎も十数日滞在しただけで、独立の喜びに沸き、日本人より優位に立ちたい朝鮮人から、間もなく退去命令が出た。鉄道員合宿所の大広間で集

団生活をするようになった。

そのうち鉄道員家族以外の者は、同じ鉄道の独身寮である江畔寮（大同江の江畔に建てられた寮）に引越させられた。はるか遠くで鉄道に従事する父がいるとは言え、ここでは部外者でついに私どもも、伯母たちから引き離され心細い生活に入ることになった。

江畔寮では、八畳一間に三家族と四人、私ども親子三人、もう一組の親子三人、臨月の若夫婦、満州から逃げて来て隠れ住んでいる元軍人二人。そしてどこから避難してきた男一人、女一人の計男六人、女六人、十二人が八畳一間にひしめき合っていた。

種々雑多な人間が、一間で暮らすにはいろいろの知恵と我慢が必要だった。台所用品の置場、押し入れの使い方、寝る場所など……。一枚の敷布団に二人ずつ他人とも一緒にならざるを得なかった。男一人、女一人の大人はやむなく同じ布団で寝ざるを得なかった。いろいろな人間の集まりとは言え、願いはただ一つ、「帰りたい。一日も早く日本に帰りたい」の一つの目標に向かって耐え難きを耐え、忍び難きも忍んで、生

きることには精いっぱいだった。

そこで、自分の意志で駅前の江畔寮から大分離れた南山町の知人の避難先、八畳のオンドルのある部屋にもぐり込んだ。あちらの両親と子供三人、孫一人、こちら親子三人、以前の勤務地で教えたことのある子供の家族でとても親しくしていたので、気楽に過ごすことができた。

帰国間際には、すぐ近くの物置小屋の一角が空いたので、そこに引っ越した。平壤に出てきて以来、五回目の引っ越しを最後に帰国命令が出たのだった。

平壤でのソ連兵

平壤鉄道南官舎にいる伯母の家族と同居していたときは、ソ連兵の北朝鮮へ進駐間もないころだった。刑務所から開放された囚人部隊が坊主頭でうろうろしていた。最前線に防波堤のつもりで狩り出された、囚人の臨時軍人らしいとの噂だった。無気味で一步も外に出られなかったし、玄関にも、窓にも板を打ちつけ、小さい裏口だけを出入口にしていた。

男はうっかり外にも出られず、ソ連兵がきたときの

相手にも出させられなかった。すぐに三顧里という兵舎跡に連れていかれ、その先はシベリアのどこか分からないが連行されるという噂で持ち切り、皆恐れおののいていた。

国の保護がなく、無秩序の時代の敗戦の憂き目を嫌というほど思い知らされる毎日だった。五十代の伯母は、おろおろしていたので、三十そこそこの私が専らソ連兵の相手役だった。

ソ連兵はよほど困苦欠乏の生活をしてきたのか、何でもかんでも欲しがったらしいが、腕時計には異常なほどの欲望を示した。一番はじめは二人のソ連兵。盛んに腕時計を欲しがった。私の腕時計はカーテンのすそにくるんで無造作に束ねておいた。

「シゲ（朝鮮語で時計）ダワイ、ダワイ」といって腕に巻くしぐさをして、耳に当てて音を聞く身ぶりをした。私は解せぬふうに、首をかしげていたが、あんまりうるさいので、伯母の家の目覚まし時計を差し出した。これならどうせ内地に持って帰られない。「これじゃない、これじゃない」というふうにしきりに身

ぶりで示していたが、あんまり勘の悪そうな日本人にあきらめて帰って行った。

二回目もやっぱり二人できて、トランクを欲しがった。一番ほしい時計のあとは、日本人からふんだくった物を入れるトランクが欲しいのだ。伯父の家のトランクは、タンスの引き出しに入れておいた。彼らは開き戸は開けるすべを知っているが、引き出しはあんまりよく分らないようだった。盛んに四角い物を下げる格好をする。私は首をかしげ、かしげ、物置から、石炭バケツを持ってきて見せた。「そうじゃない。そうじゃない」としきりに四角い手真似をするが、今度も通じない顔をして首をかしげて見せたら、とうとうあきらめて行ってしまった。

第三回目にはお金をもらいにきた。確か三人だったと思う。今度はそろそろお金がほしいらしいと聞いていたので、あらかじめ一番安い一円札をたくさん用意して二、三枚をポケットに入れておいた。予想どおり「ダワイ、ダワイ、トーニ（朝鮮語でお金）ダワイ」しつこく迫った。何回か請求されたとき、惜しそうな

顔をして一円札を二、三枚出すと、喜んで帰って行った。第四回目のときも、一円札を出したら案の定もっと大きいのをとせがんだ。これしか無いと言ったら、一円札を持って帰って行ったが、いつまで続くか分からない抑留生活のためにも、大きなお金は是非守らねばならないと思った。時計↓トランク↓金、そしていよいよ女を求めだした。「マダム、ダワイ、ダワイ」と女の危険を感じるようになったときは、伯母たちもこの官舎を追われ、私どもも鉄道員合宿所を経て、江畔寮という鉄道の独身寮で集団生活をしていた。

江畔寮での集団生活では、男子が二、三人ずつ、夜も昼も交代で見張り番をした。土、日はとても危険な日。

休日に酒をたっぷり飲んだソ連兵は、「マダム、ダワイ、ダワイ」と女を求めて押し入って来るのだ。ソ連兵が寮の近くにやってきたと見るや見張り番は「警戒」と叫ぶ。今まで長い廊下の七輪で思い思いに夕餉（ゆうじやう）の支度をしていた主婦たちは、半煮えの鍋をほったらかして避難する。大抵、天井裏か地下室だった。私ど

ものの部屋は押し入れから天井裏に、皆が上って行くと男の人が素早く蓋をするが、どこかさっぱり分からないうようにしなければならない。

まず、一番先に臨月の奥さんをみんなで押し上げて、そのあとに順々に逃げた。何しろ一部屋に四世帯（女が六人）いたのだから、一刻を争う。見つかったら一大事。生け贄になるのだ。男たちも戦戦兢兢と、皆が逃げ終わるのがソ連兵侵入前であるように祈りながら、鍋の番をしている。

ドサドサと音がする。四、五人は侵入してきたようだ。屋根裏の暗闇にだんだん慣れてはきたが、一部屋一部屋の上になつて寒さと怖さにふるえていた。緊張のあまり、「ブーン」とかすかにおもらしの音が聞こえるが、だれも笑う人もいない。ソ連兵が遠くの部屋に立ち回ったすきに、下から毛布を押し上げてくれる。零下二五、六度の平壤の屋根裏はものすごく寒い。おまけに怖さが加わって小きぎみに体が震え、歯がガタガタ、どのくらい経ったであろうか。

逃げおくれで下で隠れていた人が見つかったらしい。

暗闇の静けさの中に必死の金切り声で助けを求めているが、どうすることもできない。

屋根裏でふるえている人の顔から血の気が引いた。今夜の犠牲者だ。どこに連れて行かれるのかしら、どんな仕打ちをされるのかしら、獲物を見つけた軍靴はいつの間にか立ち去った。「警戒解除」の見張り番の声がした。あつちでもこつちでも、屋根裏や地下から部屋に戻って暖をとった。

犠牲者のことを思い、自分の安全を喜ぶことも、はしたない声を出す人もなく、沈痛な思いで食事の支度にとりかかった。引き揚げて日本に上陸するまで、夜はモンペをはいて、ぎっちり身支度をして床についたものだった。犠牲者にならないために――。

三十八度線を越えて

引揚げ命令が下ったのは、昭和二十一年六月一日だった。江西郡からこの平壤までやってきたので避難民として扱われ、もともと平壤にいた人より早目に引揚げ命令が下った。

六年生で終戦を迎えた娘は、折あしくパラチフスに

かかり、食事は快復期の重湯の毎日だった。

それからが大変だった。この子が背負うはずだったリュックサック一つ分を思い切つて処分、水筒と菓子状の葡萄糖だけを持たせることにした。何と何を持つか、食糧は、毛布類は、背負つて持てるだけに、三人分の荷物をまとめる知能は大変だった。そして金の隠し場所は、娘の皮靴の先の硬い所に百円札を丸めて入れたり、リュックサックの紐に無造作に結びこんだり、子供用水筒の外側を外して巻き込んだ。いい知恵だと喜んで水筒をのぞくと、中のガラスに百円札が丸見えでやり直したり、全然持ち金がないとかえつてあやしまれるので、半分の千五百円ぐらいを手分けして持つ工夫をしたり、命令が下つて翌朝までの一晚は、考えることもすることもあんまり多くて、アツという間に一夜は明けてしまった。

平壤駅では第一回目の荷物検査があつた。ここではお金は無事だった。でもせっかく持ってきたお金より大事な娘のマラリヤの薬のキニーネは、半分以上も取り上げられた。それも土下座して拝み拝んで、やっと

残してもらつたものだった。朝鮮にしても外交のとだえた当時、薬品は貴重な物だった。

引揚げ命令とはいうもののどこへ連れて行かれるともしれない不安な体を、貨物列車の薬の上に、ほかの不安におののく男女の群れと共に、まるで目かくししながら歩くような思いでうずくまっていた。

度々列車から降ろされては荷物の検査、そのたびに金と荷物は目に見えて少なくなつていった。父の形見のエルジンの金時計を暗がりの草むらに捨てたのもその時だった。どうしても取られなくなかつた。

暗闇の広つばに並ばされて荷物の検査をしたときの様子は、いまだに目に焼きついている。

あちらを見れば、フンドシ一つにさせられた人が、紐の間にはさんでいた虎の子を見つけられて、ひどく油をしばられている。いくらいくら所持してもよいという規則も取り決めもない。手当たり次第に治安隊のフトコロに入るのだ。ねらいを定められたら最後のなで、私どもは毛布を広げて、その上にリュックサックの荷物を並べた。靴の中の札は「出しましょう、出し

ましよう」という弱気な私に同調して出してしまった。いよいよ私どもの番になった。「二人でこの金は多過ぎるな」「この純毛の毛布はお前らにもつたない」とお金の半分近くと、弱い子供のために是非とも残しておきたい毛布は、取り上げられてしまった。反発することも、願うこともできない。国家の背景のなくなった避難民の悲しさをしみじみと味わった。

夜の明けるのを待ちかまえて、二千幾人かの一団は、土砂降りの雨の真つ暗闇の中を、南へ南へ三十八度線に向かつて歩き、進んでいた。

朝鮮特有の赤土はすごい土砂降りのため、こはぜをきつちりと留めた地下足袋さえ持つていこうとする。私は骸骨のような足をした娘の手をしっかりと握りしめながら、病後の体を抱きかかえるようにして歩いた。そして、夫の存在を確かめ、確かめ闇の道を二千人の流れに沿って一步一步南へ歩き続けた。

親から離れて泣き叫ぶ子、離れた子を求め続ける腸をえぐるような親の叫び声、ついて歩けなくなった老人のうめき声、時折、聞こえるソ連兵や朝鮮治安隊の

叱咤の声、みんなみんな入り混じって、この世の姿とも思えなかった。

二十キロも歩いたろうか。東の空が白みかけ、雨はようやくやんでいた。いつの間に行列の行進が止まったのか知らない。みんな疲れ果てて赤土のぬかるみはずぶ濡れで、立つたまま眠っていたのだった。

私の足一本は、深い眠りに落ちていた娘に抱きつかれ、その重みでしびれるほどの疲れを覚え、赤土のぬかるみに斜めに立っていた。

一同はようやく列から離れて、小高い草地を見つけて、思い思いに体を休めた。

雨の中で行進で、赤ん坊の幾人かは母の背中で死んでいた。その子供一人のために、リュックサック一つさえ背負えなかった母親の手には、今は不用になっってしまったおむつのみが、わびしく残されていた。この悲しみを分かち合う夫は、戦場で敗残兵として、またどのようなむごい仕打ちを受けているのだろうかと思像した。

早速、穴を掘り、形ばかりの葬いをする者、びしょ

ぬれのリュックサックから、荷物を出して乾かす者、食べ物の仕度をする者、みんな自分のことだけに懸命だった。

三十八度線境界守りのソ連兵との交渉も終わり、また一同は歩いた。交渉の度に全員からの金集めに、班長さんたちは足繁く動いた。地獄の沙汰も金次第とは。あの山さえ越せば南鮮だ。いよいよ北鮮の境界を過ぎたとき、二千幾人の口から異口同音に「バンザーイ」の声が山にこだました。それは歓喜とも悲痛ともつかぬ叫びだった。私にとって終生忘れることのできない「バンザイ」の叫びである。

南鮮側の境界線でのアメリカ兵の検査は実に簡単だった。さすが富める国アメリカは、避難民のうすぎたない物には目もくれなかった。南鮮人もそれに従った。危険物がなにかを確かめると、リュックサックの背中をポンと叩いて、「オーケー」「オーケー」

ここまでくると危険が去ったような安らぎを覚えた。青丹駅前で野宿、倉庫の軒下で夜露をしのいだ。夜が明けると大勢の避難民に蠅が群がるように、物々交

換の大人や子供が集まってきた。青丹から京城へ向かう。

翌日、どこかのバラックのような建物の中で、しらみの消毒が行われた。頭からおへそまで粉（DDT）をかけられ、全身真っ白になった。

そして、京城本願寺での数日の逗留。病後の娘のために、主人は高い白米を買いに行っておかゆを食べさせた。

同行の男の子を四人連れた母親に、私たちの配給食事、大豆とささげの御飯を提供してすぐ喜ばれた。その人も子供を大勢抱えて困窮していたので、持ち金の中から都合してあげた。もうここまでくればお金をとられることもない、惜しい金ではあったが、食べ盛りの子供を連れた人を見過ぎにはできなかった。

そして、いよいよ待ちに待った故国への船出だ。

仁川港から、何千トンだったのだろうか。三千人もの人たちと貨物船に乗り込んだ。疲れ切った体を船底の荒むしろの上に横たえたが、私の場所はむしろとむしろの合わせ目で、銘仙で作った防空着は、ここでの

寝起きのため、せみの羽根のようになつてしまった。

与えられた自分の位置で、寝返りもできないくらい、ぎつしり詰め込まれていた。夫は終戦直前の肋骨手術で召集を免れたものの、まだ頑健な体にもどつてはいなかった。娘は骸骨のような足、くぼんだ目、こけた頬、ようやく歩ける体だった。

第二の故郷、平壤を出発してから一カ月、疲れと栄養失調のため、病気の娘ならずとも階段の上り下りは、ようやくのことだった。

船中では、一日に幾人かずつ死んで行つた。子供や五十前後の女が多かった。その死骸が甲板のむしろの上に並べられ、遺族たちは、うつろな目で蛆取りをした。

六月半ばの暖かさに、死体の口といわず、耳といわず、次々に蛆がわいた。遺族は、にわか作りの箸で、それを丹念に空き缶に入れた。こも包みにされた死体は、水中に静かに落とされ、船はその周りを回りながら汽笛をならして別れを惜しんだ。

今、故国を目の前にして、あれほど帰りがつてい

た日本を見ることも、土を踏むこともできず、亡くなった人の心中を思うと、是が非でも生きて故国の土が踏みたかった。そして父を途中で失い、一人寂しく引き揚げて行つたという母に是が非でも会いたかった。

あれから五十年、その母も、戦後の困窮の中で亡くなり、娘も二児の親になつて、あれほどの苦い苦しきも今はだんだん薄れて「思い出」として半ば懐かしに残っているが、二度と戦争はしたくない。させたくない。この思いだけは、みんなの心につかりと根強く住みついているのではないだろうか。

生まれ故郷熊本にて

佐世保上陸、いろいろの手続を経て、生まれ故郷の熊本へたどり着いたものの、十歳のとき、渡鮮して以来の故郷。肋骨カリエス手術後、やつと一年そこそこの主人と、折あしくパラチフスにかかり、その病後療養中の娘を連れての十二キロの道のり、故郷帰りは気が重かった。どんな待遇をしてくれるかしら、三カ月ほど前に帰国したという母はどうしているかしらと疲れ切った足どりで、うる覚えの道をのたりのたりと歩

いた。

「まだか、まだか」という主人の声を聞こえぬふりして、のつたりのつたりと歩いたものだった。

④の硝子障子の入った家を見つけ、恐る恐るのぞいてみると、「君ちゃんじゃなかだろか、待ってたばい、みんな帰ってあんたが一番最後たい、おつ母さんも帰つとりなさるよ」懐かしいお祖母さんの声が聞こえるではないですか。とっておきの白い御飯と魚で迎えてくれた、あの夜の感激は忘れることができない。

三カ月前にたつた一人帰国していた母は、腎盂炎を患い病床にあった。

働き者の母が健在でいれば心配はなかったが、山形生まれの主人と浦島みたいに様子が分からなくなってしまった私と病後の娘、そして病気の母のために、明日から食うことにがんばらねばならなかった。父の家では二組の引揚者、母の家では三組の引揚げ家族、どちらを向いても助けを求められる状況ではなかった。

真夏の熊本の川べりをみのまぶり（粟の草取りをするとき、暑いのですだれのようなものを背中にしよつ

た物）の材料の葦を山ほど背負って歩いた。次の日、一口中天日に干した葦の青々としたものを、夫の手で「みのまぶり」に編まれた。それを台湾から引揚げの叔父と一緒に売り歩いた。友人、知人の多い母は腎盂炎に悩まされながらも、病床で娘らの仕事ぶりを危ぶんで眺めていた。小豆と換えたり、メリケン粉と換えたりするのだが、翌日のだんご汁に使うメリケン粉さえ、容易に集められなかった。

卵売りにも歩いた。一個九十銭で買って一円で売るのが、仕入値でしか売ることができず、十二キロの道をすごすご帰ってきたものだった。

体を消耗するだけで、収入の上げられなかった私どもは、父親の保険金と、月々定額しかおろされないわずかな郵便貯金を、かつお節でもかじるようにちびりちびり使った。

山形県で生きかえった

食うに困った私どもは、銀メシの食べられるという、主人の生まれ故郷、山形県尾花沢市にやってきた。丸つきり異なつた農家の生活に戸惑いながらも、三度、

三度食べられる銀メシはおいしかった。同じ日本の国でありながら、言葉の通じないのには、ほとほと困りぬいた。日本語の通じる日本で暮らしたいものだと、何度思ったことか。

そのうち、主人も私も教員への就職が決まり、主人の実家で居候を続けながら、義姉妹たちの温かい援助に支えられて、引揚者としては幸せな日々を過ごすことができたことを、今も感謝の念でいっぱいである。

【執筆者の横顔】

キミコさんは熊本県生まれである。父親は朝鮮で鮮鉄職員として勤務していたので、大正十四年、小学校四年のとき、母親と一緒に北鮮の平壤へ渡る。小学校、女学校を経て、京城の官立師範を卒業。小学校も女学校、師範いずれの学校でも成績優秀で、しかも明朗闊達なところから多くの親しみ深い学友に恵まれた。平壤にもどって小学校の教員に任用となり、教壇に立った。

そのころ、山形県より出向いてきた教員、岩岡武雄

校長と結婚、二人とも教職にあって精勤これ努めていた。

思いもよらぬ敗戦に遭った日本人の転勤族は蓄えた定期貯金を引き出すことも、敗戦のどさくさでどうするすべもなく、泣き寝入りしている状況下に、岩岡キミコさんはためてあった四千円の定期預金を、その警察の駐在所巡査部長に、自由に使ってください、と差し出した。

敗戦の日から、鮮内の反日分子からなる不穏な空気で暴動の惹起などで危険な様相下に、岩岡氏の部下だった朴、李の両先生がやってきて「校長先生、僕たち今晚から護衛してやります、泊まります」と岩岡家族は敗戦で身も心も碎かれてしまったところに、飛びこんでくれた鮮人二人は、地獄に仏のようだったと、今も涙を流して語る内鮮融合の実話も聞く。

戦戦兢兢の連日を、岩岡一家が切り抜けて祖国日本に引き揚げてこられたのは、キミコさんが困苦欠乏に耐えて、死一步手前で歓喜に似たる、生への祈る態度と言葉に支えられたものと思われる。

無事、平壤から引揚げ、生まれ故郷の熊本県に立寄

る。のち、御主人の岩岡氏の生誕の地山形県に引き揚げて落ち着き、兩人とも山形県教職に任用となり、岩岡武雄氏は村山市の中学校長となり、僻地教育振興に名を馳せ、キミコ夫人は教職を退職したのち、山形県食生活改善推進協議会の会長を長期にわたり勤め、県内学校、都市と農村の団体、企業職場などに広く食生活改善に大いなる功績をあげた功労者である。

よって、山形県知事から感謝状並びに厚生大臣から表彰状をそれぞれ受章している七十九歳のいまだに現職をもつ老女である。

(附)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

引揚げ体験記

広島県 藤原 千鶴子

私は、大正十二年十一月九日、富山県に生まれました。神経痛の持病のあった父は(長谷勇蔵)治療のため、近くに温泉のある松倉小学校坪野分教場に住み込みの教員でした。

昭和三年、招かれて朝鮮に一家で移り住みました。慶尚南道の鎮海(ちんかい)という海軍要港のある、放射状の整然とした美しい町並みで、桜で有名な名所でした。父は鎮海を振り出しに蔚山(ういざん)、河東と転任し、河東小学校の校長で終戦になりました。

私は鎮海高等女学校を出て教員の道を進み、昭和十九年の三月まで河東の朝鮮人小学校に勤めていましたが、教員である今の夫と結婚し退職しました。ちょうど、終戦の一年前で生活は大変窮屈になっていましたが、それでも教員という役職柄、大変恵まれた点もあ